

◆京都市の学校教育目標

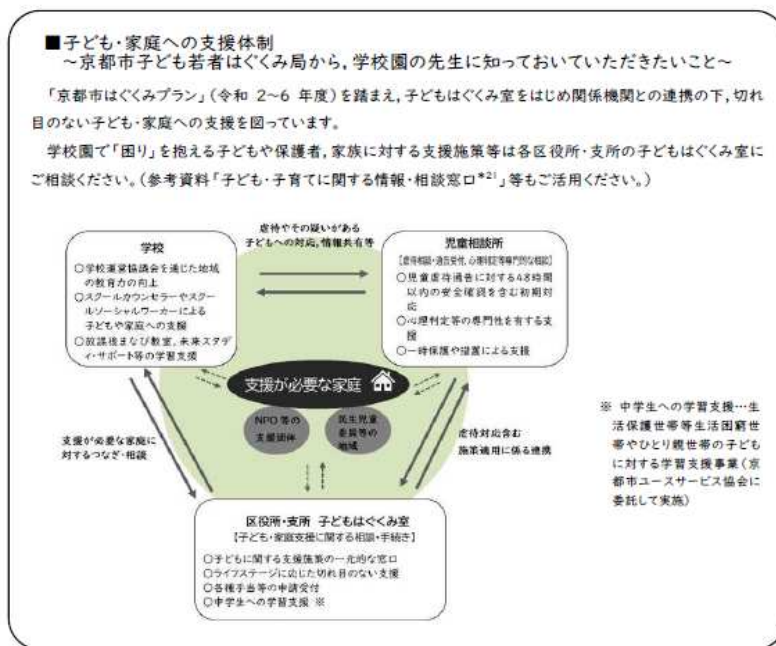
『伝統と文化を受け継ぎ 次代と自らの未来を創造する子ども』

◆目指す子ども像 3つの姿

1. 広い視野と豊かな感性を持ち、よりよい人生や社会を創造できる。
2. 様々な学びを生かし、社会的・職業的自立を果たすことができる。
3. 多様な他者と共に生き、学び合い、人権文化の担い手となることができる。

◆学校運営 ～全教職員で進める学校園づくり～ 5つの柱

1. 『いのち』～子どもの命を守りきる～
2. 『よりそい』～多様な子どもを誰一人取り残さない教育を進める～
3. 『つとめ』～教職員の職責を自覚し、研鑽することで、教育の質を高める～
4. 『ひろがり』～カリキュラム・マネジメントの視点をもって社会に開かれた教育課程を実現する～
5. 『つながり』～校種間連携・接続により子どもを支える～

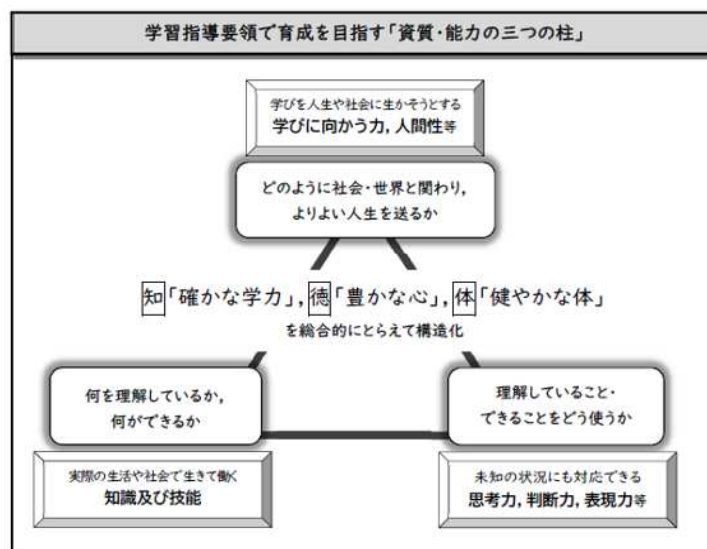


◆「生きる力」を育む15の取組

- 1 社会とのつながり・接続を実感できる授業への改善
- 2 基礎的・基本的な知識・技能の習得と言語活動の充実
- 3 探究活動を通した、主体的・対話的で深い学びの実現
- 4 グローバル化時代に対応する実践的英語力の育成
- 5 LD等支援の必要な子どもの学力向上
- 6 道徳教育の充実



- 7 伝統文化や芸術を通じ，豊かな感性・情操を育む教育の充実
- 8 規範意識の育成
- 9 多様性を理解する姿勢の涵養
- 10 支え合い高め合う集団づくりの推進と絆づくり
- 11 運動やスポーツの実践と体力の向上
- 12 保健教育の充実
- 13 飲酒・喫煙・薬物に関する指導
- 14 安全教育の充実
- 15 食に関する指導の推進



◆学校教育において重視する視点

- 子どもの「主体性」と「社会性」の育成を目指し，「自ら学ぶ力」と「自ら律する力」を学校・幼稚園全体の教育活動の中で高める。

・小・中学校期における「自ら学ぶ力」

学ぶことに興味や関心を持ち，自己の進路や将来の生き方と関連付けながら目標実現への見通しをもって粘り強く取り組むとともに，自己の学習活動を振り返り，自らの学びをよりよい方向に調整し，他者とも協働できる力

・小・中学校期における「自ら律する力」

地域・社会との関わりの中で，他者への思いやりや寛容，人と人との絆の大切さを実感し他者と協調しつつ，自らの生活や人生，地域・社会をよりよくするために，時と場に応じた正しい判断と行動ができる力

〈小・中・小中学校（義務教育学校）〉

1. 主体的・対話的で深い学びを重視した授業を通して，学びの質を高める
2. 日々の授業と家庭学習との連動を通して，自学自習の習慣化を図る
3. 自他を大切にし，「公共の精神」に基づく態度を育む

『仲間とともによりよい社会を創り出す子ども』
～自ら学ぶ力を高め、豊かな人間性を育み、心身の健康を大切に～

○基本方針

この２年間、新型コロナウイルス感染症による影響を大きく受け、社会が大きく混乱した。経済界は大きな打撃を受け、観光業界では、大変厳しい状況におかれることとなった。学校教育においては、教育活動の制限、部活動の中止や制限、多くの大会の規模の縮小や中止で、努力の成果を発揮する機会を失い、様々な経験をする機会を失った。

この２年間の取り組みの削減や縮小、変更は、今後、子どもたちに大きな影響を与えることとなるだろう。また、児童生徒への感染拡大は、学級閉鎖や自宅待機という実態を招いた。しかも、感染拡大防止のためとはいえ、何度も自宅待機を要請されることへの不満や憤りを生むことにもつながった。生活習慣や学習習慣の乱れにもつながる結果となった。GIGA スクール構想など、一人一台タブレットの時代となり、学習方法の広がりや充実につながり、その学年におさえるべき学習内容を習熟することはできたが、学習形態の縛りや学習方法の制約、多くの集会活動の停止は、今後子どもたちにどのように影響してくるのか、十分考えて取り組みを進めていかなければならない。学校行事など継続して取り組むことができなかったため、各取り組みのモデルとなる姿に出会うことができなかった。そのことを踏まえつつ、目にはみえないに教育活動への影響をしっかりととらえつつ、これからの教育活動に取り組んでいかなければならないと考えている。

新学習指導要領全面実施となり、これからの社会に生きて働く資質能力の育成を意識しながら取り組みを進められるようになってきた。しかし、まだまだ、子ども自ら主体的に学ぶことのできる力を育成し、社会的・職業的自立につながる教育の充実とはなっていない。社会の状況と関連はあるが、新学習指導要領の主旨をしっかりと理解して、進めていかなければならない。そして、グローバル化に伴い、多様な他者とつながりあい、共に学び合える資質を高めていく必要がある。

昨年度、高校の教科書の検定結果が発表され、科目編成が大きく変わるとともに、実社会とのつながりを意識した学習を重視する構成が目立っている。また、読解力の弱さも指摘され、実用性を重視した内容へと変わっている。先日、教科書検定の結果が公表された。「探究」学習の重要がクローズアップされ、課題の発見や解決、討論などの活動に多くのページが割かれるなど、課題解決型の学習の充実こそなされている。高校での学習に主体的に参加でき、学力の向上を図るには、その基礎となる学力のベースを、小学校教育の中で身につけさせていかなければならないという意識が必要である。

また、これからの社会は、society5.0 と言われ、急速なグローバル化やデジタル技術

の飛躍的な進化等を背景に、大きな変革期に直面している。また、絶え間ない技術革新、頻繁におこる自然災害、ウクライナ情勢、感染症の発生など想定外な出来事が多発している。まさしく、将来の予測が困難な時代を迎えている。その上、それぞれの出来事は、その地域だけの問題とはならず、他地域へも大きな影響を受けることにもつながっている。自分の地域だけをとらえて生きていくことは、大変難しくなっている。そのため、子どもたちは自己の生き方に向き合い、自己実現を達成するために社会や集団の変化に対応しながら生きていくことが科せられる。また、持続可能な社会を創る一人としての自覚を高めなくては、自らをよりよく生きることにはつながらない考える。ますます、グローバルに社会とつながり、主体的に自己の判断や責任において自らの行動を決定していくことが重要となる。

そこで、今まで取り組んできた学校運営をベースとして、社会の中で豊かに生きることができるよう、教育活動を着実に進めていくことが課せられている。われわれは、教育公務員としての職責を自覚し、学校に関わるすべての人と、共に生き、共に学び合える環境を大切に、主体的に参加し、自らの環境（人や自然）をよりよくしていこうとする資質の向上をめざさなければならないと考える。また、社会を構成する一人としての自覚を高め、仲間とのつながりを大切にしながら、これからの社会を創造し、人権文化の担い手として社会貢献できる人材の育成を進めていかなければならない。そして、今日、国際社会が連携して 2030 年までの達成を目指す共通の目標である「持続可能な開発目標（SDGs）」の精神である、誰一人取り残さない教育の実現を実践し、先送りしない教育をめざしていきたい。

本校の児童の実態をとらえ時、仲の良い友達との生活を楽しみに、元気よく明るく活動できる姿がある。また、与えられた状況の中で、よく言えばその状況を受け入れ活動できる姿があるが、深く読み解くと、その状況に疑問や不条理を考えずに、楽しんでいえるように思える。いいかえれば、もっとよりよくしていくために、現状を鑑み、深く思考し、仲間と語り合い、工夫を重ね、充実させていくことに弱さがある。また、仲の良い仲間との生活を楽しむことはできても、共に生活をする存在を仲間として受け入れ、深くつながることができているわけではない。同じ社会で生きる存在を仲間としてとらえる意識を高め、共に社会を創り出す仲間として、より深くつながり、積極的な交流を通して、歩みだす力の育成が必要であると考え。その上、一部の子どもには、自分の思い通りにいかないと、強い力で意を通そうとする傾向がみられる。攻撃性があり、周りの仲間威圧を与える傾向がある。言葉の使い方や幅広い視野につながる知識をもとに、より良く深く考え、共に歩もうとするコミュニケーション力の育成は、本校に与えられている課題と考える。

そこで、令和4年度から、

『仲間とともによりよい社会を創り出す子ども』

という学校教育目標を設定した。

よりよい社会を創り出すためには、より良い社会とは何かといった目標を共通理解し、そのためにそこで生活をする仲間とよりよく関わり合いながら、考え、話し合い、行動できる力を育成する必要がある。そして、主体的に生きる、自律的に生きることが求められると考える。

そのために、

- ・ 自ら学ぶ力・・・よりよい社会を創り出すためには、考える力の育成が重要である。
学ぶことを通して、まず考えるための知識を蓄積し、蓄えた知識を活用し、よりよく思考できる力を高める。
- ・ 豊かな人間性・・・社会を創り出すためには一人の力では創造することは難しい。人とつながることができて、社会の構築につながる。そのために、人と豊かに交わることができる人間性を高める。
- ・ 心身の健康・・・よりよく生きるためには、心も体も健康でなければならない。よりよい生活習慣を構築できるように自らの命や体を大切にできる心情を育み、実践できる自立心を養う。

の3つの視点を育むことを通して、これからの社会の中で、主体的に自律的によりよく生きることがきる子どもを育み、いずれよりよく社会で活躍する人間に高めていきたいと考える。そして、自ら生活をしている地域をよりよく創ることができる人として、社会に貢献できる人として、はばたいてくれることを願い、令和4年度の教育活動を推進する。

○めざす子ども像

すべての教育活動を通じて、学力の基礎・基本、人としての基礎・基本の確実な定着を図り、子どもの個性と可能性を引き出し、社会の中でよりよく生き抜く力を育成する。

- ① しっかり聞き　しっかり話す子
- ② 思いやりのあるやさしい子
- ③ 約束・ルール・マナーを守る子
- ④ 自分・人・ものを大切にする子
- ⑤ 健康・安全に気をつける子

令和4年度重点目標

- ◎どこでもだれにでも自分からあいさつができ、はきものがそろえられる子ども
- ◎ねばり強く学習に取り組み、仲間との交流を楽しむことができる子ども

○めざす教職員像

(子どもに背中を見せることができる教職員集団)

学校教育目標の具現化に向けて、職責を自覚し、自己研鑽に努め、教職員との連携を深めながら、粘り強く実践できる教職員集団

- 常に社会人、公務員としての自覚と責任をもって、考え行動できる教職員
- 最初からあきらめない、最後まであきらめない教職員
- 子どもの幸福を願い、愛情をもってかかわる教職員
- 子ども理解に努め『個に応じた指導』ができる教職員
- 自己の職能を伸ばすために研鑽を重ね、切磋琢磨し合う教職員
- 常に組織の一員としての「同僚性」を発揮できる教職員
- 家庭・地域と連携し協働する教職員
- 自分の得意分野を生かして子どもを伸ばす教職員
- 教職員のスクールマナーを励行し、学校及び自らの信頼を高める教職員
- 日々の教育活動を見直し、「働き方改革」を進め、より一層の教育の質の向上を図る教職員

★教職員研修の充実に向けて

- ・目の前の子どもの実態をとらえよりよく育むために、各主任のおもいをもとに企画運営力を高める。
 - ・各校内研修において、感想や意見など主体的な発言による参加を基本とする。
 - ・OJTによる若年研修会を充実させる。
 - ・総合教育センターの講座等に主体的に参加する。※
 - ・研究会活動に積極的に参加する。※
- ※参加して自身が得たことは、「場（全体 or 学年部 or 学年）」を設けて校内へ返していく。

○めざす学校像

よりよく子どもを育むことを第1に考え、地域の特性を踏まえ、地域の中で、地域とともに歩むことができる学校づくりをめざす。

- 令和4年度は川岡東小学校創立40周年(川岡小学校東分校から41年)の節目の年として、地域とともに学校の創設を祝い、伝統とつながりを意識し、50周年にむけて地域とともにあらたな学校づくりに取り組む学校

『協同展開』の精神で
ちゃんとやりきる川岡東

- 子どもにとって学校は安心でき、一人一人の居場所が確保されている学校
- 子どもの「心という命」「体という命」を守りきり、一人一人の子どもを徹底的に大切に
する学校

- 全教育活動が「研究」の場であり、「生徒指導」の場である学校
- 児童・教職員ともに人権感覚と社会性の育成の場となる学校
- 子どもに「社会を創り出す力」を育成するための「主体性」と「社会性」をつけるため、教職員が力を合わせ、組織として、計画的・継続的な取り組みを行える学校
- 子どもたちが力を合わせ、楽しい気持ちで学び合える学校
(学校は、楽しいところ、厳しいところ、協力し合うところ)
- 保護者・地域・保育園（幼稚園）・中学校等関係機関と連携・協働する学校
- 校内の美化に努め、教育環境を整え、学びやすい学校

○学校教育目標の具現化にむけて★★★★★★★★★★★★★★★★★★★★

1「確かな学力」の育成に向けて

自分の良さに気づき、豊かに人と関わる子を目指し、国語科や道徳科を通して、言葉を大切に、自分の思いや考えを豊かに交流できる子どもの育成を推進する

①学級経営力・授業力の向上

- 人権を大切にしたい一人一人の居場所がある学級経営を行う。
- 「明日も学校に行きたい」と登校を待ち望むことができるような学級・学年づくりを進める。
- 学習規律の確立。教職員の「待つ」姿勢と児童の「聞く態度」「相手意識」を育てる。
- 授業改善、授業力向上のための教材研究の工夫と見直しを進める。
- 京都市独自の教育課程指導計画に基づく指導を徹底し、指導と評価の一体化に努める。
- 各学年で指導すべき基礎的・基本的な知識・技能を確実に習得させ、すべての子どもに学習基盤の確立を図る。
- 主体的・対話的で深い学びを重視した授業を通して、学びの質を高める。
- 各教科・領域の学習において、問題解決的な学習や探究活動を充実させるとともに習得した知識・技能を活用し、言語活動（話す・読む・聞く・書く）を重視した授業の展開を工夫する。
- 指導方法の工夫（一斉指導とグループ学習・座席の工夫等）指導体制の工夫（T・Tや習熟度別指導等）により、「わかる・できる喜びと学ぶ楽しさ」を実感できるように個に応じた指導を充実させる。
- 授業の流れがわかる（めあて・目標→まとめ・ふりかえり）板書とノート指導を充実させる。
- カリキュラムマネジメントを意識しながら、ICT機器等を積極的かつ効果的に活用した学習活動を充実させる。（GIGAスクール構想の充実）
- 英語を用いて積極的にコミュニケーションを図れるよう英語教育を充実させる。
- 1時間（45分）を大切にするとともに児童が主体的に学習に取り組む授業を実践する。
- 校内研究の充実を図るとともに、研究の成果を発表し、広く意見や感想をいただき本校の研究活動の充実に努める

○企画委員会での学年間の連携と学年会および低中高学年部会の連携を充実させる。

②学力向上・学力定着への取り組み

○学力向上推進チームを効果的に機能させ、教職員全員で学力向上をめざす。

○「全国学力・学習状況調査」、「京都市学習支援プログラム（ジョイントプログラムやプレジョイントプログラム）」、「京都市学力定着調査」の結果分析から実態を正しく把握、共通理解をして授業改善を図る。

○帯時間の活用（系統的な取り組み）により基礎的・基本的な学力の確実な定着を図る。

○授業内容と家庭学習の連動を強化し、家庭学習の充実を図るとともに、自学自習の習慣化を図る。

○学び方を学ぶ機会を充実させるとともに、時には家庭学習の仕方など提示することで、効果的な家庭学習を提案し、家庭学習の習慣化と共に家庭学習が充実できるように働きかける。

③総合育成支援教育の充実

○個別の指導計画を立案し、個の課題に応じた教育を充実させる。

○総合育成支援教育部を中心とした校内体制で、個の課題に応じた支援を充実させる。

○LD等通級指導担当者、総合育成支援員等との情報共有と連携を密にし、学力向上の取り組みを推進する。

○各関係機関と連携し、子どもの実態を明確に分析し、適切な支援を行う。

2「豊かな心」の育成に向けて

自他の命、生き方、考え方を大切にする心情と規範意識の育成

①人権尊重を基盤とし、つながりを深め、互いに高め合う集団づくりの推進

○すべての児童が、学級や学年の中に自分の居場所を実感できるように、存在感や成就感・達成感を感じ、相手のよさを認め、互いに指摘し合える学級・学年の風土を創りあげるとともに子ども同士のつながりを積極的に支援する。

○全教育活動の中で、子どもの人権が守られるとともに、人権を大切にする子どもを育てる。

○すべての児童が、学級や学年にとどまらず、他学年や育成学級（なかよし学級）の存在を認識し、仲間としての意識を高め、互いを尊重し、共に成長し合う教育を推進する。

②人権教育の充実

○学校教育活動のすべてが人権教育であり、すべての活動を通して、児童の人権意識の高揚を図る。

○月ごとに人権にかかわるテーマを設定し、全校で同じ人権テーマで学ぶ機会を通して、学校全体で共に学び合う機会とし、意識の高揚を図る。

○人権にかかわる学習について、指導事項や指導方法や教材などを保存し、次年度への指導の資料にするとともに、より効果的な取り組みとするための参考資料とし、学校の人権教育の推進につなげていく。

○教職員自らの人権意識を問い直す機会を意図的に設定し、定期的に自らを問い直し、人権に関わる学校環境をより良く高めていく。

○新たな人権問題や社会の実情に関わって、まず、教職員が積極的に学ぶ機会を大切にしていく。

③道徳教育の充実

○令和３年度・４年度と京都市教育委員会から「しなやかな道徳（桂川中学ブロック）」の研究指定にあたり、中学校ブロックでの連携を深めるとともに、小中や小小の連携を通して、道徳教育の充実を図る。

○道徳教育推進教師を中心に全教育活動を通して、公共心や公德心、生命を尊重する心、感謝する心等の道徳性を養う活動を充実させる。

○「道徳年間指導計画」をもとに、計画的に道徳の授業を行う。

○「生きる力」を活用し、「道徳の時間」を充実させる。

○道徳科についての授業研修を行い、考え、議論する道徳の深化を図る。

④生徒指導の取り組みの充実

○「見逃しのない観察」「手遅れのない対応」「心の通った指導」を徹底し、問題行動・いじめ・不登校を未然に防ぐように努める。

○「川岡東スタンダード」の内容をしっかりと把握し、活用を通して温度差のない指導の徹底と内容の同一化に努める。

○子どもの背景にまで踏み込んだ児童理解を深め、受容・共感の姿勢で子どもとの関わりを深める。

○『学校いじめ防止等基本方針』のもと、学校体制として、いじめを許さない集団づくりを進め、問題の早期発見・早期対応に取り組む。

○児童虐待の防止のため、児童の生活背景の把握と細かな観察を励行する。

○不登校の実態や課題を把握し、学校復帰に向けて組織として積極的に取り組む。

○心の居場所づくり（担任、養護教諭、スクールカウンセラー、教職員の共感的な関わり）に努める。

○管理職との連携を密にし、各関係機関との連携を図るとともに、多角的に児童の実態をとらえ、柔軟に支援できるように努める。

⑤豊かな感性・規範意識の育成

○委員会活動やたてわり活動等の児童会活動を充実させ、リーダーシップ、自分や他人を思いやる心を育てる。

○読書活動を推進し、豊かな心を養う。

○様々な体験活動や人との関わりを通して規範意識や忍耐力を培う。

○スマホ・ケータイやインターネットに対する情報モラル教育の充実を図る。

○社会の一員としての自覚を持たせるとともに社会に貢献できる人となるため、人のために尽すことの喜びの実感などを通して、社会性を養う。

○公共心を養うための公共物を大切に扱う指導を徹底する。

3 「健やかな体」の育成に向けて

心身の健康に関する意識を高め、生活習慣の確立とともに、継続した取り組みで体力の向上を図り、安全で安心な生活を推進する自己管理能力の育成

①運動・スポーツの実践

- 全ての子ども達が運動やスポーツの楽しさと喜びを味わえる指導の充実をめざす。
 - ・全校マラソン大会を一つの目標にした体力づくりの推進（ランニング、縄跳び etc）
 - ・部活動ガイドラインをもとにした部活動の活動時間を保障する。
 - ・記録会や交流会などへの参加を目標に部活動の充実を図る。

②基本的生活習慣の確立

- 生活アンケートの実施と現状の分析を踏まえ、家庭と連携し効果的な取り組みを図る。
- 家庭との連携を強め、食事・運動・睡眠の調和の取れた生活実践をめざす。
- 「早寝・早起き・朝ごはん」などの**基本的な生活習慣**の大切さについての理解を図る。

③「食」に関する指導の推進

- 栄養教諭と連携した食育指導の充実を図り、食の大切さと和食の文化についての理解を深める。
- 「**食物アレルギー対応委員会**」による児童へのアレルギー対応を徹底する。
- 食物アレルギー研修会を実施し、教職員の食物アレルギーに対する認識と対応の仕方を共通理解しておく。
- 栄養指導の充実を図ることや日々の学級活動を通して、食に関わる人々と食物への感謝の心を育てるようにする。

④保健教育の充実

- 定期的な保健指導を実施し、健康に関する意識を高める。
- 自分の健康を適切に管理し改善していく力を育てる。
- 薬物乱用・飲酒・喫煙等の害について正しい知識を身につけ、適切な行動ができる指導の充実を図る。
- 人権教育としての性に関わる指導の充実を図ることで、自他の命や体を大切にする心情を育む教育を推進する。
- フッ化物洗口や給食後の歯磨きの励行により、むし歯予防の実践をめざす。

⑤安全教育の充実

- 安全ノートを活用した安全教育により、自分の命は自分で守ろうとする態度を育てる。
- PTAや地域の関係団体の協力のもと地域ぐるみの学校安全の実現をめざす。
- 機会あるごとに安全に関わる話をし、意識を高める。
- 実地訓練を実施し、いざというときの教職員の認識を深める。

⑥防災教育・防災管理の充実

- 危機管理マニュアルに基づく研修や訓練の実施を通して「主体的に行動する態度」を育てる。
- 野外活動・社会見学・遠足等においては下見を十分に行い、安心・安全な活動に努める。

4. 開かれた学校づくりにむけて

学校の取組を積極的に配信するとともに、学校と地域、学校と保護者の連携を高め、協働推進できる学校づくりをめざす。

○学校評価の分析と速やかな公表

- ・児童、保護者、教職員の3者比較を通して実態を明らかにする。
- ・アンケートの分析を通して、学校実態を発信し、保護者や地域と課題を共有化して連携を深める。

○ホームページや学校だよりの充実

- ・ホームページの積極的な更新を通して、日常の学校の様子を伝える機会を大切にする。
- ・学校だよりやホームページに学校の方針や取組の意図を提示し、学校運営の理解と協力を求める。
- ・学校だよりを保護者や各種団体（および地域住民）への回覧を積極的に行い、学校の取組を理解いただき、支援いただく。

○学校運営協議会の充実

- ・年3回開催し、学校の実情など伝え、組織的な運営を図る。
- ・委員の方と学校との話し合いを通して、子どものよりよい成長を願った取組を模索する。
- ・必要に応じて臨時協議会を開催し、喫緊の課題について実情を提示し、ご意見をいただき、よりよい課題解決につなげる。

○保幼小連携の充実

- ・地域の就学前施設との連携を図れるように取り組み方法やよりよい連携の仕方を模索する。
- ・就学前施設との交流を設定し、顔の見える連携を通して、スムーズな就学や、子どもや保護者のよりよい支援につなげる。
- ・就学前や就学後の児童の様子を交流する中で、家庭教育や地域教育の共有化を図る。

○桂川中学ブロック小中連携、小小連携の充実

- ・4校（3小1中）のよさを生かした、9年間の連続性を考慮した学びと育ちの充実を図る。
- ・コロナ禍で多くの交流行事が中止となったが、2年間の閉塞的な経験を踏まえ、よりよい交流を考え実践し、小中のスムーズな就学をめざす。
- ・桂川中学ブロック校長会の積極的な開催を通して、児童や生徒の実態を共有化し、つながりを大切にした取り組みを実践する。
- ・桂川中学ブロックの教職員の研修会を行い、児童や生徒の様子を通して教職員の連携を図り、小中連携や小小連携の充実を図る。
- ・小中連携の目指す子ども像を共有化し、義務教育の出口を見据えた教育実践を進めていく。